

オリヴィエ・メシアンの《七つの俳諧》—「重積」という基軸図の様々な彩色／装飾としての分析

藤田 茂

本論文は、メシアンの音楽の分析に「基軸図」という道具を導入し、この作曲家の音楽を、この基軸図にもとづいた素材の配置の遊びとして記述する、最初の試みである。モデルとして選ばれるのは《七つの俳諧》(1962)で、実際その7つの楽章は、「重積」という基軸図が枝分

かれし、様々な素材によって彩色／装飾されていく過程として記述される。この記述から以下の結論が提示される。メシアンの音楽の全体性は、展開・変奏されるテーマの統合力によって獲得されるのではない。彼の音楽の全体性が獲得されるのは、ちぐはぐな素材が織り成す音響の極度の複雑さの中に、透かし絵のようにして立ち現れる「単純なるもの」によって、なのである。この分析が「基軸図」として定式化しているのは、実は、この「単純なるもの」に他ならない。